

大前研一

ビジネスの「壁」にぶつかったときに助けてくれる!!

限界を突破する 考え方

今ある壁を突破するにはどうすべきか。まず何よりも自分を変えようという意識に目覚めることだ。しかも生半可でなく、劇的に変えようという強い意識に!

日本屈指の経営コンサルタント、大前研一が伝授する

「限界」を突破する考える技術。

君はリブートする覚悟があるか!?

大リーグで戦う力を持つ
それが本物のプロだ

21世紀は答えのない時代だ。米国ですら明確な答えを持ち合わせていない。イラク問題ひとつ解決できていないのが何よりの証拠だ。北の將軍様はさらに悩みが深い。どんな策を打っても叩かれるばかり。八方塞がりもいところである。

こうした局面下にあつてビジネス界ではどんな地殻変動が起こっているのか。最たるものひとつがエキスパートの時代は

終わったということだ。まともに稼ぐことはできない。たとえばプログラマー。どんなに腕を磨いたところで、10分の1のコストでインドに持っていかれる。モノづくりもそうだ。価格競争で中国やベトナムにかなわないから量産品を中心に日本からどんどん出ていく。コンピュータや機械に置き換えられていくことにもなる。新しいことのできる人間だけがこうした陶太を逃れることができるのだ。

にもかかわらず、世の中にはまだまだエキスパート志向がある。だからすぐに行き詰まる、壁に打ち当たって限界を感じるのだ。であれば何を目指すべきか。プロフェッショナルだ。

プロフェッショナルとエキスパートを混同している向きも多いが、両者は明らかに違う。目指す高みが全然違う。ベースボールの世界でいえば、大リーグで戦う力を持っているかどうかだ。本物のプロフェッショナルならばその力量を持ち合わせている。日本のプロ野球界止まり





経営コンサルタント

大前研一 Kenichi Ohmae

マサチューセッツ工科大学大学院博士課程修了後、日立製作所、マッキンゼー・アンド・カンパニー日本支社長などを経て、現在、ビジネス・ブレークスルー大学院大学の学長を務める。また世界の大企業やアジア・太平洋の諸国家をクライアントにコンサルタントとしても活躍。

「ビジネス・ブレークスルー」

<http://www.bbt757.com/>

「大前研一通信」

<http://www.ohmae-report.com/>

だったら厳しい言い方だが、真のプロとはいえないのだ。

場所や舞台が替わっても新しい環境に適応し、活躍できて初めてプロフェッショナルといえる。ビジネスの世界でも同じ。世界のひのき舞台でリーダーシップを発揮して誰もが認める仕事をこなせるかどうかが重要なキーポイントだ。これができなければ所詮ローカル止まりのエキスパート。中国やインドに仕事を奪われ、ジリ貧状態になるのは目に見えている。そうならないためにもこれからは本物のプロフェッショナルを目指すべきなのだ。

模範解答を用意する 学校教育の罪

冒頭、述べたとおり、答えのない時代である。本物のプロは

こうした時代でも誰もが思いつきもしない発想でもってきちんとした答えを導き出せるものだ。喩えていえば、未開のジャングルに分け入って周りの枝を切り落とし、今晚の寝場所を確保するのはエキスパート。ある狙いを持ってジャングルそのものの景色を変えてしまう力を発揮するのがプロフェッショナルだ。

ところが日本人は答えの決まっていない問題を解くのは苦手で学校教育の弊害だ。模範解答がついている問題しか出さない。型にはめた教育で徹底指導する。せっかくなしく作ってあるフィナルファンタジーも「攻略本」から読んでしまう人間に育つ。結果的に答えがないと不安になる腑抜けを粗製乱造し、世の中に送り出してしまおう。受け入れる会社もいい迷惑だ。

そんな人間が役に立つわけがないのも道理。自ら答えを導き出せないから常に上司の顔色を窺っている。上はどんな答えを望んでいるのだろうか、指示待ち族に墮するのだ。

「リブートする覚悟があるかどうか。今後の人生を左右する重要な決断だ」

人生をオールクリア ゼロベースからやり直せ

日本企業に長く勤めていく多くのビジネスマンはこうした悪癖が深く身に染みついていく。だから限界突破の出口を見出せず、悩むのだ。これでは今後の21世紀を生き抜いていけない。

そうならないためにはどうすべきか。偏見や思い込みなど自分の悪癖はもちろん、モノの考え方、発想法をすべて洗い流し、ゼロベースから始める必要がある。生活スタイルや人間関係も含めて見直す。そのうえで新たな世界でリーダーシップを発揮するためのスキルや見識を体得すべく、10年間は死に物狂いでやるという心構えが肝心だ。むろん容易なことではない。

そのためには儀式が必要だ。たとえば今35歳だとする。人生80年だと想定してあと倍以上は生きる勘定だ。生まれてこまできたのと同じくらい長い人生がこの先あるわけだ。生まれ直

せばいい。おおまかな青写真として最後の20年について、きちんとした人生を過ごすためにこれからの10年は徹底的に訓練するんだという決意を固める。

まさにリブートだ。最近ではパソコン用語として使われるが、もともとはカウボーイの言葉だ。ブーツの中にいつの間にか麦藁が入り込み歩くと気持ちが悪いくらい。いくら歩いても藁は出ていかない。思い切って立ち止まり、面倒だが一度靴ヒモをほどいてブーツを逆さまにして藁を落とす。これがリブートだ。パソコンの世界でリブートといえば、操作中に不具合が発生した場合の最後の手段。スイッチ

腹を固めて取り組む 10年は必死の努力を

を切って立ち上げ直す。人生もこれが必要だ。要はもったいない、このまま行けばいいなどと過去に固執せず、オールクリアしてゼロベースからやり直す。リブートする覚悟があるかどうか。今後の人生を左右する重要な決断となる。

腹が固まったらやることは3つだ。ひとつは語学。英語でもって人を説得できるほどの力を持つことだ。リーダーシップの根幹はコミュニケーション。通訳を通してイエスカノーを聞くだけではコミュニケーションは

ビジネス・ブレイクスルー大学院大学

(<http://www.ohmae.ac.jp/>)

大前研一氏が学長を務める我が国初のインターネットによる経営大学院。ネットワーク技術を駆使した双方向の遠隔教育で国際社会に貢献できるビジネス・リーダーの育成を目指す。2年間の徹底訓練で修了時にはMBA(経営管理修士)を取得可能



社員だけではなく。経営トップにも役立たずは多い。前任者のやり方を踏襲するのが我が社の伝統などとはさく社長もいる。前例のないことには答えがないから手をつける自信がない。だから無難に前任者を踏襲したほうがいいという発想だ。すべての産業、企業が変わらなくてはいけない今の時代に、リーダー失格もいろいろある。だが本人たちは少しもおかしいとは自覚していないのが常。なぜか。学校教育で叩き込まれた癖が会社に入ってからさらに磨きがかかり、いつの間にか思考空間が狭くなっているからだ。常識的に考えても、どうもおかしいということすら気づかない。メンタルブロックができあがってそんな思いに至らないのだ。





21世紀のビジネスを戦う 三種の神器

1. 英語で人を説得する力

世界で活躍するためには英語は必須。ただうまいというだけでなく、人を説得できるまでのレベルでなければ意味がない。リーダーシップの根幹はコミュニケーションであり、そのコミュニケーションをうまくとるには交渉相手と直接やりとりする必要がある。こちらの細かいニュアンスを伝えたり、相手の気持ちを汲み取りながらでなければ互いの意思を通じ合わせることができないからだ。そこまでの英語力をまずは身につけたい。

大前研一直伝の「実践英語」

「Practical English for Global Leaders」

<http://www.ohmae.ac.jp/ex/english/>

2. 誰もが納得する論理的思考

英語よりさらに広い世界の共通言語、論理的な話に納得しない民族は恐らくいない。AはBで、BはCである。したがってAはCですねと言って「おかしい」という人間はいない。むろんAはB、BはCという論拠も必要だ。その意味で論理的思考の技術も磨きたい。ただロジカルに走ることは禁物。反発を食らうからだ。そのためにも英語によるコミュニケーション技術とセットで使いこなすと効果的だ。

問題解決力 <http://www.lt-empower.com>

3. ブレークスルーの発想法

答えなき時代の切り札。どんなに論拠を積み重ねても答えが出ない、これまで経験したことのない問題が次々と発生する今日、最も必要とされるツールだ。そのパターンや思考法を徹底した訓練でいかに身につけていくかが生命線となる。少しずつよくしていこうとの発想で取り組む改善とは全く違うアプローチで問題解決を図っていく着想。卓越した英語力と論理的思考に加えて、ブレークスルーの発想法が加われば強力な武器となる。

大前流「限界突破の発想法」

「大前研一イノベーション講座」

<http://www.ohmae.ac.jp/ko>

上記の2、3でご紹介しているプログラムは
BBT 大学院大学入学時に単位認定されます

うまくいらない。勢い、リーダーシップも発揮できない。そのためにも交渉相手と英語で直接やりとりしながら微妙なニュアンスを伝えたり、汲み取ったりしながら心を通わせて説得していく能力が必要なのだ。それほど英語が使いこなせるように全力投球することがまずは肝心だ。

2つ目は論理的思考。英語よりさらに広い世界の共通言語だ。AはBで、BはCである。したがってAはCであると言って納得しない民族はいない。正しい論理はどこに行っても正しいのだ。その意味で論理的思考の技術を身につけることも重要だ。ただし、あまりロジカルに走りすぎると反発を食らう。1つ目のニュアンスまで伝えられる英語によるコミュニケーション技術とセットで使いこなすと効果的といえる。

だが答えなき時代だ。この2つではどうしようもない場合がある。だから3つ目に必要になってくるのが限界突破（ブレークスルー）の発想法だ。誰も経験したことのない壁に打ち当たったときにどうするか、答えを導き出していく手法である。私は今自分が知る限りの限界突破のやり方を、誰でも入れ、インターネットで修得できるオープンカレッジとして提供している (<http://www.ohmaeonaicampus.com/jp/index.htm>)。こうしたことは同じ志を持つ仲間と一緒に相互に啓発し合いながら身につけていくことが肝心だ。

今までの延長線上ではなく、劇的に自分を変えるためにリブートし、10年間は必死の思いで3つの新しいスキルの達人になるべく努力することだ。